中国料理店の〝桃李〟。2時間以上に及ぶ難儀話も一致点を見出せず

京都全日空ホテルで面談している最中にも、妙齢の女性が登場した。四条河原町に位置する百貨店勤務。強持てで鳴らすS氏の手前、三神さんは動揺する。「難儀な話の最中や。もう少し掛かる。あっち坐って待っといて。後で美味い中華、食べさせたるから」、と声を掛けた。

その難儀な話は2時間以上に及ぶも一致点を見出せず、「よお覚えとき。この街、二度と歩けん自分には、為りとうないやろ。それは、あんたの対応次第や」、と次の予定へ向かうS氏は言い置いた。

「まあ、まあ。そやし、京都まで来てくれはったんや、こうして」。透かさず三神さんが助け船を出して呉れたが、その前に既に胴震いは訪れた。

「どうです、一緒に中華、食べましょか」。ややあって、三神さんが提案する。編集長の伊藤さんも担当のY氏も僕も固辞したが、然りとて無下には断り切れぬ。儂は入洛の客人を持て成し

たいんや、と半ば押し切られ、御池通と河原町通の交差点脇。味気なき高層階建てに改築する前の京都ホテル。その佇まいは、ハンブルグやコペンハーゲンの由緒正しきホテルを想起させるのだった。

中国料理店の桃李は、地階に位置していた。遮光膜を窓に貼ったBMWから降り立ち、5人で円卓を囲む。三神さんの連れはワンレングスだった。既に往時、斯くなる呼称は一般的であったのか、と問われると心許ないが。今日的、然れど日本的な相貌の痩軀だった。美麗。

「田中はん、何でも好きな物、頼んで下さい。京都で一番美味い中華ですわ。なっ、そやろ」、と半身を後ろに回し、相槌を求める。見遣ると、支配人と思しき人物が、些か当惑気味に首を縦に振っている。結局は大半を三神さんが選択した。冷菜三種盛り合わせに始まる、誰もが慣れ親しんだ内容であった。

個室での接客係は20歳そこそこの、技量の未熟な女性で、大振りなスプーンとフォークをサーヴァーに用いての所作は、ぎこちない。片手のみでは処理し切れず、左右に1本ずつ持って、掬い上げようとする。見兼ねて僕が途中で代わり、皆の皿へ取り分けると、彼は甚く感激してくれた。「たいしたもんや。何処で習いましたん？」。

答えに窮し、門前の小僧ですわ、と取り敢えずは西日本風の抑揚で躱し、車海老のチリソース掛けが入った小皿を配り終えると、僕は箸を手にした。

「お箸は駄目なんです。間に指が入れられなくて」。それは本当だ。茶碗の内壁に付いた御飯粒

を一つひとつ、最後に箸で摘む、なあんて芸当は夢の夢。だのに、自慢じゃないが、スプーンとフォークでサーヴする際には、千切り野菜でも一本一本、難なく摘めてしまう。謎。

一品だけ、僕が要望した鶏肉とカシューナッツの賽の目切り・レタス包みにも、三神さんは感嘆してくれた。「こんなん、知りませんでしたわ。しょっちゅう、ここで食べとるのに。ほーっ、オイスターソースをレタスに下地で塗るんですか」。無論、桃李の品書きにも記されていて、それで僕は頼んだのだった。

「後で言わなあかんね、支配人に。同じ料理ばっか勧めんと、偶には斬新なんも出して欲しいわ」。一拍置いて、「なあ」と四条河原町で普段は売り場に立つ彼女に語り掛けた。「田中はんとデートする女性は、楽しいやろな。色んなもん、食べれて」。

「けど、あきまへんで、この娘に手を出すのだけは。京都の街、歩かれへん様になりたいんなら、それも宜しいけど」。隣席の彼女が円卓の上に置いていた掌をポン、と軽く叩きながら三神さんは僕に忠言する。

「滅相もありません」。即座に言葉を返すと、「冗談ですわ。田中はん。あんたも真面目なお人やなぁ」、〝裏社会〟で鎬を削るとは凡そ思えぬ、人懐こい表情を三神さんは浮かべるのだ。

「それで、訂正の件は、どうしましょうか？」。伊藤さんが最後に尋ねた。「訂正を出すのは吝かでありません。田中さんも同じ気持ちです。ただ、私たちとしては、堅気で居らっしゃる御子息らに、再び御不快な思いをさせてしまうのではないかと、案じておりまして」。

「そこなんですわ。弱ったこっちゃ、弱ったこっちゃ」。幾度と無く赤坂プリンスホテルの客室で繰り返したのと同じ科白を三神さんは吐き、ややあって、呟いた。

「暫し時間を戴けませんやろか。何ぞ良い方策、浮かばんものか、考えてみますわ」。

連絡が有ったのは2カ月余り後、11月29日の夜だった。翌日、僕は京都東急ホテルでの講演を控えていた。入洛を予め、会津小鉄会の側に伝えるべきであろうか、思い倦ねていた所への連絡だった。講演会の話は既に耳にしている、終了時に正面玄関へ迎えに行く。事務通達を行なうかの如く、三神さんは一方的に喋り終えると、電話を切った。

当日、広告代理店の女性が東京から一緒だった。京都駅で僕はコインロッカーに立ち寄る。控室にお持ち戴いて一向に構いませんのに、と事情を知らぬ彼女は訝る。その日、大阪へ宿泊する心算だった。交際していた客室乗務員も、乗務で来阪するのだった。

だが、小振りとは言え、旅行鞄を提げて三神さんにお目に掛かる訳にはいかない。大阪に泊まる？　部屋、取りますから、京都でゆっくりしていきなはれ、飲みに連れて行きますさかい、……。一人で一晩、お付き合いする程の度量を、不甲斐なくも当時31歳の僕は、持ち合わせていなかった。

お疲れでしょう、お茶でも如何ですか、と講演を終えた僕を気遣う主催者の横で、ホテルの従業員が囁く。田中様、ロビーにて三神様がお待ちで御座います、と。そこそこに辞去し、彼と共にBMWの後部座席に乗り込む。前回とは異なる女性が、運転席に坐っていた。

「田中はん、儂の娘ですわ」。「はあ？」。自分の子供は未だ幼児で、妻は自分よりも二回り近く年下。舶来物の洋服が好きで、矢鱈と金が掛かって困る。と前回、彼は教えてくれたのに。「先妻の子供ですわ。気立て、いい娘でっせ」。どう反応したら良いものか、咄嗟には思い浮かばず、「どうも初めまして、お父様には、お世話になってます」、何とも間の抜けた挨拶をする内に、河原町通から鴨川寄りの細い路地へと入っていく。

「田中はん、今日は、事務所にお連れしますわ。その方がじっくり、話も出来ますやろ」。備え付けの自動車電話で、何処ぞと連絡を取り終えると、三神さんは僕に〝宣告〟した。促され、車から降りる。と幾人もの若い衆が建物の中から飛び出してきて、僕を取り囲んだ。

温厚で実直な中小企業経営者風の三神さんとは凡そ異なり、髪の毛を短く刈り上げた彼らは、図体も大きく、相貌も険しい。「まあまあ」、と三神さんは往なすが、彼らは僕に体軀を当ててくる。胴震いを超えて、僕は立ち

竦(すく)む他なかった。